

## 『民経記』の『和漢朗詠集』摂取について

小野 泰央

(二〇一〇年十一月三十日 受理)

## はじめに

例えば、藤原定家の『明月記』における『白氏文集』受容についての調査が盛んになりつつあるのに比して、藤原経光の『民経記』における韻文表現が指摘されることは稀であった。<sup>(注2)</sup>ただし、『民経記』における漢詩文引用は、『明月記』のそれに引けをとらない。その多くは、出典を示さない漢籍引用、所謂、地の文に融合する引用であって、主に『和漢朗詠集』に依拠している。

## 一、句集として―表現の濫用として―

『和漢朗詠集』は詞華集であるので、その引用は表現の換骨奪胎が目的であった。次のごとく、『和漢朗詠集』表現を一所に集約して引用している用法は、やはり、『和漢朗詠集』を表現集として意識していた表れである。それが高じて、『和漢朗詠集』における句意と齟齬をきたしている場合がある。次は対句を引用するあまり、文脈につじつまが合わなくなっているところである。<sup>(注3)</sup>

河竹呉竹響満<sup>レ</sup>耳遮<sup>レ</sup>眼者歟。(『民経記』嘉禄二年(一二三六)十二月十六日)

〔出典〕山路日落、満耳者樵歌牧笛之声。潤戸鳥帰、遮眼者竹煙松霧之色へ山路に日は暮れぬ、耳に満つるものは樵歌牧笛の声。

\*人文科学系・国文学

『民経記』の『和漢朗詠集』摂取について

潤戸に鳥は帰り、眼を遮るものは竹煙松霧の色

『和漢朗詠集』卷下「山家」紀斉名

「河竹呉竹」の「響」であるから聴覚であって「満耳」には対応するが、「竹煙」がないと「遮眼」には対応しない。「河竹呉竹」で既に「竹煙」を含むということなのだろう。実景にはなかったが、『和漢朗詠集』の対句を取り込もうとしたための措辞であると考えられる。

表現集として利用した最たる例が、次の十五夜の景色を長々と漢詩文調で示しているくだりである。

抑今夜十五夜良辰美景也。更闌夜静、月明風冷、終夜棹<sup>レ</sup>篇舟<sup>レ</sup>、蘆荻繞<sup>レ</sup>川繁<sup>レ</sup>、楊柳臨<sup>レ</sup>岸生<sup>レ</sup>、白露隔<sup>レ</sup>千里<sup>レ</sup>、蒼波滿<sup>レ</sup>万里<sup>レ</sup>。寒衣擣<sup>レ</sup>雪之心、「村笛吹<sup>レ</sup>月之思、毎事動<sup>レ</sup>心腸<sup>レ</sup>之者也。良久、遠寺鐘」「動、荒巷鷄鳴、鶏籠之山」「雲横、兔園之露漸晞之程。令<sup>レ</sup>著<sup>レ</sup>鳥羽南門<sup>レ</sup>給。令<sup>レ</sup>帰<sup>レ</sup>蓬門<sup>レ</sup>給之後、東山日昇之程也。(『民経記』安貞元年(一二二七)八月十五日)

〔出典〕更闌夜静、長門閉而不開。月冷風秋、团扇查而共絶へ更は闌に夜は静かにして、長門は闌として開かず。月は冷に、風は秋にして、团扇は杳として共に絶えたり

『和漢朗詠集』卷下「恋」張文成

〔出典〕蒼波路遠雲千里 蒼波 路 遠くして 雲 千里  
白霧山深鳥一声 白霧 山 深くして 鳥 一声  
(『和漢朗詠集』卷下「行旅」橘直幹)

〔出典〕范蠡収責。棹扁舟而逃名。謝安辞功。伏孤雲而養志。范蠡は責を収めて、扁舟に棹さして名を逃る。謝安は功を辞して、孤雲に鞭ちて志を養ふ。

〔和漢朗詠集〕卷下「述懷」大江朝綱

〔出典〕韓康独往之栖。花葉如旧。范蠡扁舟之泊。煙波惟新。韓康は独往く栖。花葉は旧のごとし。范蠡は扁舟の泊。煙波は惟新たり。

〔和漢朗詠集〕卷下「山水」大江澄明

〔参考〕州蘆夜雨他郷涙 州蘆の夜の雨 他郷の涙  
岸柳秋風遠塞情 岸柳の秋の風 遠塞の情

〔和漢朗詠集〕卷下「行旅」橘直幹

〔出典〕蜀茶漸忘浮花味 蜀茶 漸く 浮花の味ひを忘れ  
楚練新伝擣雪声 楚練 新たに 雪を擣つ声を伝ふ

〔和漢朗詠集〕卷上「秋興」源相規

〔出典〕蕭索村風吹笛処 蕭索たる村風 笛を吹く処  
荒涼隣月擣衣程 荒涼たる隣月 衣を擣つ程

〔和漢朗詠集〕卷下「田家」高相如

〔出典〕酒軍在座、菟園之露未晞。僕夫待衢、鶏籠之山欲曙。酒軍は座に在りて、菟園の露は未だ晞ず。僕夫は衢を待ちて、鶏籠の山曙けなんと欲す。

〔新勅朗詠集〕卷下「酒」紀資名

「更闌夜静、月明風冷」が「更闌夜静、長門閑而不開。月冷風秋、团扇查而共絶。更は闌に夜は静かにして、長門は閑として開かず。月は冷に、風は秋にして、团扇は杳として共に絶えたり。」〔和漢朗詠集〕卷下「恋」張文成）を成句としても、対句としても依拠している。以後の「終夜棹篇舟」、蘆荻繞川繁、楊柳臨岸生、白露隔千里、蒼波滿万里は五句であるが、規則的な五言でまわっている、詩の形態を成している。その「棹篇舟」は『和漢朗詠集』に二箇所見られる「范蠡」に関する句

であり、「白露隔千里、蒼波滿万里」が対句として「蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一声。蒼波路遠くして雲千里、白霧山深くして鳥一声。」〔和漢朗詠集〕卷下「行旅」橘直幹 から、別に「鶏籠之山」「雲横、兔園之露漸晞」が『新撰朗詠集』の「酒軍在座、菟園之露未晞。僕夫待衢、鶏籠之山欲曙。酒軍は座に在りて、菟園の露は未だ晞ず。僕夫は衢を待ちて、鶏籠の山曙けなんと欲す。」〔新勅朗詠集〕卷下「酒」紀資名 から換骨奪胎しているから、その「蘆荻繞川繁、楊柳臨岸生」も「州蘆夜雨他郷涙、岸柳秋風遠塞情。州蘆の夜の雨他郷の涙、岸柳の秋の風遠塞の情。」〔和漢朗詠集〕卷下「行旅」橘直幹 から引用していると考えられる。「鶏籠山」については、『民経記』に別に、

于<sub>レ</sub>時、曉鐘以後鶏籠山、猶未明帰<sub>二</sub>陋廬<sub>一</sub>、休息、窮屈無<sub>レ</sub>術者也。〔民経記〕貞永元年（一一三三）五月十二日

とあつて、中国の地名が曙という時刻を示す語として使われている。時代のなかで多用された結果であつて、漢籍依拠の最たる現象であるといえる。

さらに『民経記』に見られる特徴は、その風景描写が往々にして典型的であるということである。例えば、次は時刻を表す描写に繰り返し記され、やはり、定型的に用いられている。

鶏人定驚<sub>二</sub>人眠<sub>一</sub>者歟。〔民経記〕嘉祿二年（一一二六）六月十九日

于<sub>レ</sub>時、鶏人曉<sub>レ</sub>唱、定明王眠驚者歟。〔民経記〕嘉祿二年（一一二六）十二月十六日

夏夜最短、鶏人之唱滿<sub>レ</sub>耳。〔民経記〕寛喜元年（一一二九）五月二十一日

于<sub>レ</sub>時、蓬宮雲明、鶏人之唱滿<sub>レ</sub>耳。断<sub>二</sub>心腸<sub>一</sub>者也。〔民経記〕貞永元年（一一三三）十月四日

鶏人漸唱之時事了。各退出。〔民経記〕嘉祿二年（一一二六）四月十三日

〔出典〕鶏人曉唱、声驚明王之眠。鳧鐘夜鳴、響徹暗天之聴。鶏人は曉に唱ふる。声は明王の眠りを驚かす。鳧鐘は夜に鳴る。響は暗天の聴きに徹す。

## 『和漢朗詠集』卷下「禁中」都良香

「鶏人」は、古代中国の時刻を告げる官職の名であるが、実際に時が告げられたのではなく、曉方という漠然とした時刻を表していると思われる。先に示した「更闌夜静」も次のごとく多用される。

月色不<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>秋、更闌夜閑、断腸者歟。『民経記』嘉禄二年（一二二六）六月十一日

于<sub>レ</sub>時、更闌夜閑、巷間人方定。『民経記』嘉禄二年（一二二六）六月十九日

連歌三十員、月明風冷、更闌夜静也。『民経記』嘉禄二年（一二二六）七月十四日

于<sub>レ</sub>時、更闌夜静、月明風冷。『民経記』嘉禄二年（一二二六）九月十五日

于<sub>レ</sub>時、更闌夜静、月明風涼。『民経記』安貞元年（一二二七）四月十四日

更闌夜静、月明風冷。『民経記』安貞元年（一二二七）八月十七日

更闌夜静、月明雲収。『民経記』寛喜三年（一二三二）四月九日

更闌夜静、荒巷無<sub>レ</sub>人、動<sub>レ</sub>心者也。『民経記』天福元年（一二三三）一月十六日

この頻度とその字句の性格からいつて、それは慣用的な表現であるといえるが、対のそれぞれ「月色不<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>秋」「月明風冷」「月明雲収」も、『和漢朗詠集』の対である「月冷風秋」によると考えられる。

これから一つの表現を何度も使用し、その表現を自らのものにしようとする意識が伺えると同時に、成句化されて、原点への意識が希薄になっている過程でもあると考えられる。

## 二、原典との関係

『和漢朗詠集』は編纂されて以来、漢詩文表現を引用するのに最も簡便

なる書であつたから、逆に詞華集としてその表現を引用することはできても、個々の詩句の背景まで踏まえているかは問題の残るところある。この点においての可否を探ることは、当時における公家にとっての漢文学の意義を探る一助になる。

## ア、原典への依拠

## i、情景への依拠

『民経記』における修辭的な『和漢朗詠集』引用に最も多いのが情景描写における引用である。次のごとくである。

雁声過<sub>レ</sub>枕破<sub>二</sub>曉夢<sub>一</sub>。『民経記』嘉禄二年（一二二六）十月九日

〔出典〕胡鴈一声、秋破商客之夢。巴猿三叫、曉霽行人之裳へ胡雁は一声、秋は商客の夢を破る。巴猿は三たび叫びて、曉は行人の裳を霽ほす

『和漢朗詠集』卷下「猿」大江澄明

深雨之間不<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>鐘声<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>歛<sub>二</sub>耳也<sub>一</sub>。『民経記』寛喜三年（一二三二）三月十二日

〔出典〕遺愛寺鐘欽枕聴 遺愛寺の鐘 枕を欽てて 聴き  
香鑪峯雪卷簾看 香鑪峯の雪 簾を捲けて看る

『和漢朗詠集』卷下「山家」白居易

三千世界遮<sub>二</sub>眼前<sub>一</sub>、紅霞隔<sub>レ</sub>山、緑水逢<sub>レ</sub>眺、帝都之家山猶当<sub>レ</sub>眼、無<sub>レ</sub>何断腸了。『民経記』天福元年（一二三三）一月二十六日

〔出典〕三千世界眼前尽 三千世界 眼の前に尽きぬ

十二因縁心裏空 十二因縁 心の裏に空し

『和漢朗詠集』卷下「山寺」都良香

紅霞隔<sub>二</sub>遠山<sub>一</sub>、遠望所<sub>二</sub>断腸<sub>一</sub>。『民経記』天福元年（一二三三）一月二十七日

〔参考〕江霞隔浦人煙遠 江霞 浦を隔てて 人煙 遠し  
湖水連天鴈点遙 湖水 天に連なりて 雁の点づること

遥かなり

『和漢朗詠集』卷下「眺望」橘直幹

嵐声渡<sub>レ</sub>枕、琴曲驚<sub>レ</sub>夢、琵琶又調<sub>レ</sub>曲、断<sub>レ</sub>愁腸<sub>レ</sub>者也。『民経記』寛

喜三年（一二三二）八月十三日

『出典』曲驚楚客秋絃馥 曲 驚きて 楚客の秋の絃の馥し

夢断燕姬曉枕薰 夢 断えて 燕姬が曉の枕に薰ず

『和漢朗詠集』卷上「蘭」橘直幹

未<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>孤寝、紅燭空残、断<sub>レ</sub>心腸<sub>レ</sub>了。『民経記』天福元年（一二三三

三月十六日）

『出典』嚴粧金屋之中、青蛾正画。罷宴瓊筵之上、紅燭空餘<sub>レ</sub>粧を金屋

の中に嚴くして、青蛾は正に画けり、宴を瓊筵の上に罷めて、

紅燭は空しく餘れり

『和漢朗詠集』卷下「曉」謝觀

于<sub>レ</sub>時、高樹風涼、蟬声滿<sub>レ</sub>耳。宜夏眺望。心閑即身涼、断腸者也。『民

経記』寛喜元年（一二三九）五月二十八日

『出典』相思夕上松台立 相思ひて 夕に 松台上りて立てば

蜚思蟬声滿耳秋 蜚の思ひ 蟬の声 耳に満てる秋なり

『和漢朗詠集』卷上「秋晚」白居易

遠出・宮中での行事・独り寝など、日常から乖離した状況などの時に使

用していることは、感傷的な場面において漢詩文引用を使用していること

が理解できる。それは意識した文飾である。ただそれは、前代の例えば、

『後二条師通記』や『台記』にも見られる現象であって、漢文日記が漢詩

文表現を引用する時の常套の手法であった。

## ii、心情への依拠

単なる風景描写だけではなく、原典から読み取ることができる心情まで

も踏まえる場合がある。例えば、次の句である。

寒雨蕭々打<sub>レ</sub>破窓。自<sub>レ</sub>今日<sub>レ</sub>予為<sub>レ</sub>扶<sub>レ</sub>持病<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>鹿食<sub>レ</sub>也。『民経

記』貞永元年（一二三三）閏九月五日

春雨濛々打<sub>レ</sub>破窓、徒然消<sub>レ</sub>永日<sub>レ</sub>者也。『民経記』天福元年（一二三三

三月十二日）

為<sub>レ</sub>消<sub>レ</sub>永日<sub>レ</sub>、終日稽古。『民経記』暦記・天福元年（一二三三）三月

二日）

『出典』秋夜長。夜長無睡天不明。耿耿殘燈背壁影。蕭蕭暗雨打<sub>レ</sub>窓声へ

秋の夜は長し、夜長くして睡ることなければ天も明けず。

耿耿たる残りの燈は壁に背ける影、蕭々たる暗の雨は窓を打

つ声あり

『和漢朗詠集』卷上「秋夜」白居易

『出典』竹院君閑銷永日 竹院に 君 閑にして 永日を銷し

花亭我醉送殘春 花亭に 我 酔ひて 殘春を送る

『和漢朗詠集』卷上「三月尽」白楽天

对<sub>レ</sub>一樽之濁酒、忘<sub>レ</sub>憂了。『民経記』天福元年（一二三三）二月十二

日）

『出典』茶能散悶為功淺 茶 能く 悶を散ずれども 功をなすこ

と浅し

萱導忘憂得力微 萱 憂ひを忘るといへども 力を得る

こと微なり

『和漢朗詠集』卷上「酒」白居易

「打<sub>レ</sub>窓」「消<sub>レ</sub>永日」は、一所に二句を引用する。「打<sub>レ</sub>窓」の原典は『白

氏文集』「上陽白髮人」で、宮中で天子に知られずに、上陽宮に幽居した宮

女の物憂い気持ちを示す。「消<sub>レ</sub>永日」は幽居を示し、「忘<sub>レ</sub>憂」は憂いを

忘れるというそれぞれ文字通りの意。『民経記』はそれを持病や鬱屈に対す

る感情として用いる。「忘<sub>レ</sub>憂」は飲酒という設定においても共通する。特

に「永日」とは違って、「打<sub>レ</sub>窓」の語は単なる風景を表す語であるが、原

拠の宮女の思いを意識しなければ形成されない引用で、「打<sub>レ</sub>破窓」とす

ること、明確に憂鬱な文脈を示していると考えられる。

であるから、次の「破窓」も意識して使われていると考えられるのである。

及「黄昏」之間、頻射「破窓」、唯叫「孤寢」、民戸人家皆以「払」地。『民経記』安貞二年（一一二八）十月七日

後「歸蓬門」、于「時」、寒嵐殊甚、疎屋破窓危者也。『民経記』安貞二年（一一二八）十月二十九日

先「秋見秋色」、先「所断愁腸」也。排「破窓」閑望之外、無「他事」者也。『民経記』寛喜三年（一一三一）六月二日

終夜閑遊、床席有「勾」。破窓多涙、傷心断腸了。『民経記』天福元年（一一三三）四月十一日

浮世事所「相談」也。臨「曉天」排「破窓」、片月東細。『民経記』天福元年（一一三三）四月二十六日

曙雲東聳之程、愁驚「燕寢」了。破窓曉光来。可「歎可」悲。『民経記』天福元年（一一三三）四月三十日

菖蒲之蓬屋、雨又灑、露頻滴排「破窓」、相共芳語、連枝比翼契、松蘿魚水交、自「昔至」今匪「直」也事歟。『民経記』天福元年（一一三三）五月五日

依有「勞事」不「出仕」。排「破窓」。稽古之外、無「他營」。『民経記』天福元年（一一三三）五月十一日

併以消「之」、排「破窓」。稽古之外、忘「他事」了。心神惘然者也。『民経記』天福元年（一一三三）五月十一日裏書

『和漢朗詠集』に見られない語であるが、「窓」が当時の日本の家屋になんというかと、中国漢詩に「今日見名如見面、塵埃壁上破窓前（今日名を見るに面を見るごとく、塵埃壁上破窓の前）」（『白氏文集』卷十四「感化寺見元九劉三十二題名处」）「風射破窓燈易滅、月穿疏屋夢難成（風破窓に射し燈滅し易し、月疏屋を穿ち夢成り難し）」（『全唐詩』杜荀鶴「旅中臥病」）とあることから考えて、それは詩語であつたと考えられる。

ただし「打窓」の原典は宮女の鬱況であり、官人の経光とはその状況

を異にする。女性としての思いを設定するならば、女との交情を記しとめる『民経記』においての次のような引用は、その背景を意識した引用であるといえる。

羅衣染「御香」之句、薰「翠簾」之内。『民経記』寛喜三年（一一三一）一月九日

夜衣染「御香」之句、傷心了。『民経記』天福元年（一一三三）二月八日

羅衣染「御香」之句、彌咽「淚」了。『民経記』天福元年（一一三三）三月十九日

〔出典〕外人不識承恩処 外き人は識らず恩を承くる処

唯有羅衣染御香 唯 羅衣の御香に 染まる

〔和漢朗詠集〕卷下「妓女」元稹

翠黛紅顏對「月」前、弥其色深者歟。『民経記』天福元年（一一三三）二月十四日

翠黛紅顏之句、争不「愛」之哉。『民経記』天福元年（一一三三）三月六日

翠黛紅顏色、誰不「愛」之乎。『民経記』天福元年（一一三三）三月十三日

〔出典〕翠黛紅顏錦繡粧 翠黛 紅顏 錦繡の粧ひ

泣尋沙塞出家郷 泣きて 沙塞を尋ねて 家郷を出づ

〔和漢朗詠集〕卷下「王昭君」大江朝綱

欲「歸歌」五噫」了。『民経記』元年四月二十七日

〔出典〕齡亜顏駟。過三代而猶沈。恨同伯鸞。歌五噫而將去（齡は顏駟に亜げり、三代を過ぎてなほ沈めり、恨は伯鸞に同じ、五噫を歌ひて將に去らんとす）

〔和漢朗詠集〕卷下「述懷」橘正通

漸驚「燕寢」、傾城欲「歸」。『民経記』天福元年（一一三三）一月四日

燕寢夢驚、春夜欲「明」。『民経記』天福元年（一一三三）三月六日

願「燕寢寂寥」之時、相共致「芳談事」、心断腸了。『民経記』天福元年



へ一二三三〇三月二十日）

燕寝夢驚、漸欲歸。『民経記』天福元年へ一二三三〇三月二十一日）

感恩追レ時催、燕寝涙落。『民経記』天福元年へ一二三三〇四月十四日）

臨レ曉漸驚「燕寝」。欲レ帰歌「五噫」了。『民経記』天福元年へ一二三三〇四月二十七日）

曙雲東聳之程、愁驚「燕寝」了。『民経記』天福元年へ一二三三〇四月三十日）

燕寝非「寂寞」。

『民経記』天福元年へ一二三三〇五月六日）

燕寝専レ夜之芳契、更不レ浅者歟。『民経記』天福元年へ一二三三〇五月十九日）

〔参考〕陶門跡絶春朝雨 陶門 跡 絶ゆる春の朝の雨

燕寝色衰秋夜霜 燕寝 色 衰ふ秋の夜の霜

『和漢朗詠集』卷下「閑居」大江以言

『民経記』には五人の女性との交情が記されているが、『白氏文集』以外の原典を持つ句からも引用する。漢詩に描かれている妖艶なる世界を醸し出そうとしている。

## イ、原典からの乖離

ただ『和漢朗詠集』に表現集としての要素を取ろうとするならば、むしろ原典の意を汲まない引用にこそ、その傾向の最たる現象があるといえる。最も頻繁であるのが、先に言及した次の「打」窓（『和漢朗詠集』巻上「秋夜」という句である。

自「今曉」深雨打「窓」、今日賀茂祭也。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇四月二十五日）

大雨打「窓」、予参「北野」。中納言殿七箇日御参也。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇五月十八日）

天陰、雷雨打「窓」。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇六月二十四日）

天晴、及「昼雷雨打」窓。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇六月二十五日）

及「黄昏」少雨下。へ入「夜雨声打」窓、蕭々如「秋」。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇六月二十八日）

雨下声打「窓」、蕭々断腸者也。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇七月一日）

及「未一点」雷雨打「窓」而雷下也。入「夜月明風冷」。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇七月十四日）

終日大風雨打「窓」松「梢」、無「別事」。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇八月十六日）

天陰、時々秋雨打「窓」。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇八月二十五日）

朝間天晴、及「晚頭」秋雨時々打「窓」。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇九月二日）

天陰、入「夜」、秋雨打「窓」、今日庚申也。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇九月八日）

入「夜」、月光明々、又時雨打「窓」、動「心情」者也。『民経記』嘉禄二年へ一二二六〇十二月十五日）

朝間天晴、及「昼雷雨時々打」窓。『民経記』安貞元年へ一二二七〇六月六日）

天陰、秋雨蕭々打「窓」。『民経記』安貞元年へ一二二七〇八月二十三日）

時雨終日打「窓」、無「指事」。『民経記』安貞元年へ一二二七〇九月二十日）

八日）

嘉禄二年（一二二六）から翌安貞元年（一二二七）の秋にかけての雨の形容に集中して用いる。ただしそこには鬱屈した思いを読み取ることはできない。むしろ、特に「無」指事」などからは、その平凡なる状況を確認することができる。この「打」窓」の裏返しとして、

雨夜閑窓徒然之間。『民経記』天福元年へ一二三三〇一月五日曆記）

などもその発展した表現ということになるが、やはり、原典における上陽人の幽居での心境が反映されていない。

「打」雨」と同様に『白氏文集』の漢女を題材にした作品を原典とする

句からの引用が多い。次のごとくである。

楼殿蛩飛思悄然。『民経記』安貞元年（一一二七）六月十四日

〔出典〕夕殿蛩飛思悄然 夕の殿に蛩 飛び 思ひ 悄然たり

秋燈挑尽未能眠 秋の燈 挑げ尽して 未だ眠ること能はず

『和漢朗詠集』卷下「恋」白居易

于<sub>レ</sub>時、幽思不<sub>レ</sub>窮、愁腸欲<sub>レ</sub>断、荒巷無<sub>レ</sub>人、閑窓有<sub>レ</sub>月。『民経記』寛喜元年（一一二九）六月二十日

更闌夜静、荒巷無<sub>レ</sub>人、動<sub>レ</sub>心者也。『民経記』天福元年（一一三三）一月十六日

〔出典〕幽思不<sub>レ</sub>窮。深巷無<sub>レ</sub>人之处。愁腸欲断。閑窓有月之時へ幽思は窮まらず。深巷に人無き处。愁腸は断えんと欲す。閑窓に月有る時

『和漢朗詠集』卷下「閑居」白居易

前者は「長恨歌」における楊貴妃亡き後の宮殿の物寂しい情景を表しているが、『民経記』では単に賀茂社の秋の夕景を意味するのみである。この引用もまたその恋情を反映していない。後者も、出典は諸説あるが、その貧女の鬱屈とした境遇を示しているとはいえない。むしろその前者は、『和漢朗詠集』の四句を前後させながら四字の句を形成して、修辭的である。さらに「愁腸欲<sub>レ</sub>断」については、次のごとくやはり濫用される。

入<sub>レ</sub>夜、聊聞<sub>レ</sub>艶言之妙、臨<sub>レ</sub>曉天、愁腸先欲<sub>レ</sub>断者也。『民経記』寛喜三年（一一三三）四月十四日

帶露之色、先<sub>レ</sub>秋見<sub>レ</sub>秋色、先所<sub>レ</sub>断<sub>レ</sub>愁腸也。排<sub>レ</sub>破窓<sub>レ</sub>閑望之外、無<sub>レ</sub>他事者。『民経記』寛喜三年（一一三三）六月二日

半更罷<sub>レ</sub>宴之趣、愁腸欲<sub>レ</sub>断者歟。『民経記』寛喜三年（一一三三）六月五日

欲<sub>レ</sub>歸之涙、先点<sub>レ</sub>袖、断<sub>レ</sub>愁腸之者也。『民経記』寛喜三年（一一三三）六月十日

『民経記』の『和漢朗詠集』撰取について

時月明、風涼、宮掖人定、所<sub>レ</sub>断<sub>レ</sub>愁腸也。『民経記』寛喜三年（一一三三）六月二十日

嵐声渡<sub>レ</sub>枕、琴曲驚<sub>レ</sub>夢、琵琶又調<sub>レ</sub>曲、断<sub>レ</sub>愁腸者也。『民経記』寛喜三年（一一三三）八月十三日

紫野雲林院辺荒巷草深、本院之遺跡無<sub>レ</sub>人跡、無<sub>レ</sub>何所<sub>レ</sub>断腸也。『民経記』貞永元年（一一三三）五月二十九日

惜別の場面だけでなく、閑散とした風景にも用いられていることを考えると、断腸より少し軽い感慨深いくらいの意味であるとも考えられる。女性との交情の記事においても、それが使われていない点で修辭的な使用であるといえ、その時期が限定されているところに、機械的に記述する意識が見られるのである。これも慣用化した果ての現象であると考えられる。『白氏文集』中の宮女に関する作品を出典とした句以外にも次のようにある。

自<sub>レ</sub>鳥羽辺<sub>レ</sub>棹<sub>レ</sub>扁舟。似<sub>レ</sub>煙波三十宿。『民経記』安貞元年（一一二二）七月二十五日

〔出典〕范蠡收責。棹扁舟而逃名。謝安辞功。伏孤雲而養志へ范蠡は責を収めて、扁舟に棹さして名を逃る。謝安は功を辞して、孤雲に鞭ちて志を養ふ

『和漢朗詠集』卷下「述懷」大江朝綱

〔出典〕韓康独往之栖。花葉如旧。范蠡扁舟之泊。煙波惟新へ韓康は独往く栖。花葉は旧のごとし。范蠡は扁舟の泊。煙波は惟新たなり

『和漢朗詠集』卷下「山水」大江澄明

原典の意図は官人の隠棲にある。出典は呉を滅した後、范蠡が越王勾踐の元から小舟を浮かべて五湖に去ったことを意味する。それが鳥羽周遊に用いられている。

### 三、時代のなかでの位置

これらの『和漢朗詠集』を中心とした漢詩文表現の引用は、もちろん『和漢朗詠集』編集以後の傾向であるが、特に院政期に至ってからその傾向が強くなる。『和漢朗詠集』表現は『東関紀行』『海道記』や源通親の『高倉院殿島御幸記』『高倉院升遐記』に多用され、その源通親の「擬香山模草堂記」が載る成實堂文庫の『作文大体』に付随する「四季雜筆記」には、『和漢朗詠集』の字句に類するような語句が四季によつて分類されている。あたかも作詩・作のための手控えのごとくである。鎌倉期における作詩の手法がいかに『和漢朗詠集』等に限定され、さらに類型的になっていったことを垣間見ることができる。であるから、大きく見て『民経記』の『和漢朗詠集』受容も時代背景と決して無関係ではないわけである。

ただ『和漢朗詠集』表現そのものが鎌倉作品に広く浸透していることから、それらの作品との関連も視野に入れなければならない。<sup>(注4)</sup>『和漢朗詠集』以外の作品からの表現引用がないわけではなく、<sup>(注5)</sup>それらも中世の作品との関連を考慮しなければならないが、特に『民経記』において濫用している『和漢朗詠集』は中世に至って多くの作品に引かれたから、それらの作品における『和漢朗詠集』との関連に触発されているとも考えられる。

その最たる関連が『明月記』である。例えば、『民経記』にも多用されている「打窓」(『和漢朗詠集』卷上「秋夜」という句は平安の漢文日記には見られない。管見によると、『明月記』から次のように見られる。

終夜暗雨打窓。『明月記』安貞元年(一二二七)七月二十五日

暗雨打窓。『明月記』寛喜二年(一二三〇)七月十七日

終夜聞暗雨打窓之声。『明月記』寛喜二年(一二三〇)九月十三日

夜雨打窓。『明月記』寛喜二年(一二三〇)十二月十二日

夜雨打窓。『明月記』寛喜三年(一二三一)九月八日

夜猶打窓。『明月記』天福元年(一二三三)八月二十六日

終夜雨打窓。『明月記』嘉禎元年(一二三五)六月二十五日

佐藤恒雄氏によると、「上陽白髮人」の詩の世界とは関係ないとするが、藤川功和氏によると、寛喜二年(一二三〇)の「暗雨」は病身を意識しているとする。<sup>(注6)</sup>その点では、『民経記』における同句の受容と相違するが、「破窓」における用法には通じる。

そもそも『明月記』における『和漢朗詠集』引用にその背景を踏まえている受容がないわけではない。藤川功和氏は、先に示した『明月記』における「紅葉黄落」の受容が、老身の形容を引用したとする。<sup>(注7)</sup>佐藤氏は、『明月記』中の『和漢朗詠集』に採られた白詩句の引用を挙げ、さらに『和漢朗詠集』に収められた人口に膾炙していた詩句の多くに、定家は早くから親しんでいて、しかる後(あるいは平行して、また逆の場合もありえたであろうが)『白氏文集』の原詩を顧み、その詩句の一部を裁ちいれて文章を彩なしたのである。図式的にいえば、朗詠集から白詩へというのが、定家の漢詩文受容の方向であったと考える<sup>(注8)</sup>という。このことは『民経記』に当てはまる指摘である。すなわち『和漢朗詠集』を表現集として利用しておきながら、特にそこに採られた『白氏文集』中の宮女に関する句を引用し、さらにその引用を『和漢朗詠集』に採られた句以外の『白氏文集』中の作品にまで派生させている。

ただ現在指摘されているかぎりでは、『明月記』の漢詩文引用は『白氏文集』に力点がある。この点で『民経記』における漢詩文受容の傾向と相違する。加えて、殊に作品の深意を踏まえているか否かを比較すると、『明月記』には『白氏文集』の作品名を明記する場合があつて、その言及に表面的な引用もないわけではないが、<sup>(注9)</sup>多くがその背景を踏まえる。<sup>(注10)</sup>地の文に融合する引用においても表面的な引用がないわけではなく、<sup>(注11)</sup>完全なる背景の一致ではないものの、特に喜怒哀楽などの方向を同じくするという例が多い。<sup>(注12)</sup>この点に『明月記』における漢詩文引用の多くがあるといえる。

これに比して、『民経記』は、女性との交情記事において、『白氏文集』の「長恨歌」を始めとする宮女に關係する作品の引用は詩句の本意を踏まえた受容である。<sup>(注13)</sup>この点に、現在、指摘されている『明月記』における漢



詩文受容と比べても、より作品の背景に即した使用方法であるといえる。それを詞華集である『和漢朗詠集』を経由している例があるということが、翻って『和漢朗詠集』への深い理解であるといえるわけである。

#### 四、漢詩文引用の意図

このように漢詩文表現に依拠する理由は彼の漢字を基盤としていると考えられる。『民経記』における漢字については、次のごとく記されている。予「被授史記孝文本紀」。『民経記』安貞元年（一二二七）八月十九日）

今日中納言ニ予奉<sub>レ</sub>請<sub>二</sub>文選一卷・李善表<sub>一</sub>、伝聞。『民経記』安貞元年（一二二七）九月二十三日）

『史記』『孝文本紀』と『文選』の一卷および李善の表を学んでいる。『史記』に関しては不明であるが、時期から考えて、『文選』と同じく父藤原頼資から授かったか。

さらに経光が日記中で「稽古」としている文脈に、次のごとく『柱下類林』に触れる場面が現れる。

為<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>不<sub>二</sub>出仕<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>消<sub>二</sub>永日<sub>一</sub>終日稽古、又柱下類林等持之間當時破<sub>レ</sub>石所<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>也。『民経記』暦記・天福元年（一二三三）三月二日）  
終日稽古之外無<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>。又柱下校合。儒弁之至要書也。『民経記』天福元年（一二三三）四月二十二日曆）

ここから『柱下類林』を学ぶことも稽古であって、同書が漢文集であるから、それは同時に彼の作文の準備であったことが推測される。

経光も次のごとく、『白氏文集』の詩を自ら抜書きしている。

自<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>文集抄出。『民経記』天福元年（一二三三）五月十三日）

前後の女性に関する記事が『白氏文集』の「長恨歌」を始めとする表現を受容していることから、それは日記を形成する際の文飾としても使われたとも考えられるが、根源には、作詩もしくは詩序の作成の準備がその要

因であると考えられる。

次の記事は、その作詩と日記の記述を関連付けることができる。

于<sub>レ</sub>時、更<sub>レ</sub>闌夜静、月明風冷、如法欲<sub>レ</sub>曙之程、著<sub>二</sub>鳥羽南門<sub>一</sub>、七条朱雀引替<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>例。其間参<sub>二</sub>詣熊野<sub>一</sub>人々在<sub>レ</sub>道、禅林寺僧正僧正云々。棹<sub>二</sub>扁舟<sub>一</sub>参<sub>二</sub>給<sub>一</sub>、其間月已欲<sub>レ</sub>入之程也。河霧籠<sub>二</sub>岸柳<sub>一</sub>、野露滴<sub>二</sub>洲蘆<sub>一</sub>者也。少時日已出、其間霧猶<sub>レ</sub>带<sub>レ</sub>河、舟中寂寞之間、有<sub>二</sub>当座<sub>一</sub>勒<sub>レ</sub>詩。

秋日言志 勒 治部権少輔経光

水辺秋色尋臻処 水辺の秋色 尋ね臻る処

寂々道場礼世尊 寂々たる道場にて 世尊に礼す

江上羈遊唯歷旦 江上の羈遊 唯 旦を歴ぎ

舟中高会正覃昏 舟中の高会 正に 昏に覃ぶ

蒼波路遠独飛鷺 蒼波の路 遠く 独り飛ぶ鷺

白霧溪深空叫猿 白霧の溪 深く 空しく叫ぶ猿

蘆荻蕭条花漸冷 蘆荻 蕭条として 花 漸く冷かなり

梧桐灑落露方繁 梧桐 灑落 露 方に繁し

故山月色随孤棹 故山の月の色 孤棹に随ひ

隣寺鐘声送遠村 隣寺の鐘の声 遠村に送る

雲海沈々靈地静 雲海 沈々として 靈地 静かなれば

社壇我可仰神恩 社壇にて 我 神恩を仰ぐべし

『民経記』嘉祿二年（一二二六）九月十五日）

日記記事の「更闌夜静、月明風冷」が「更闌夜静、長門閑而不開。月冷風秋、团扇杳而共絶（更は闌に夜は静かにして、長門は閑として開かず。月は冷に、風は秋にして、团扇は杳として共に絶えたり）」『和漢朗詠集』巻下「恋」（張文成）により、「棹（扁舟）」が「范蠡収賁。棹扁舟而逃名。謝安辞功。伏孤雲而養志（范蠡は賁を収めて、扁舟に棹さして名を逃る。謝安は功を辞して、孤雲に鞭ちて志を養ふ）」『和漢朗詠集』巻下「述懷」（大江朝綱）によっていることは先に示した。特に後者は、詩の「故山月色随孤棹（故山の月の色孤棹に随ひ）」に派生している。さらに日記記事における

「河霧籠岸柳」、野露滴洲蘆」の「岸柳」「洲蘆」の対は、先にも示した「州蘆夜雨他郷涙、岸柳秋風遠塞情」州蘆の夜の雨他郷の涙、岸柳の秋の風遠塞の情」、『和漢朗詠集』卷下「行旅」橘直幹）によっている。それがやはり詩の「蘆荻蕭条花漸冷、梧桐灑落露方繁」蘆荻蕭条として花漸く冷くなり、梧桐灑落露方に繁し」を導き出していると考えられる。というのも、その対句の前の「蒼波路遠独飛鷺、白霧溪深空叫猿」蒼波の路遠く独り飛ぶ鷺、白霧の溪深く空しく叫ぶ猿」という句は、同じく橘直幹の、同じく『和漢朗詠集』同所のやはり、先に示した「蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一声」『和漢朗詠集』同所のやはり、先に示した「蒼波路遠雲千里、白霧山深鳥一声」へ蒼波路遠くして雲千里、白霧山深くして鳥一声」、『和漢朗詠集』卷下「行旅」橘直幹）に拠っているからである。さらに、その『和漢朗詠集』の両句に同時に拠っているのは、それ以前の

夏日於舟中即事（夏日に舟中に於ける即事）

舟中景気宴遊好 舟中の景気 宴遊 好く

江上鐘揺夕日傾 江上の鐘 揺れ 夕日 傾く

柳岸煙光蕭索道 柳岸の煙に 光る 蕭索たる道

蘆洲風響渺茫声 蘆洲の風に 響く 渺茫たる声

蒼波一夜雲千里 蒼波の一夜 雲 千里なり

白霧数行月五更 白霧の数行 月 五更なり

簇族青山当眼処 簇族たる青山 眼に当る処

玄流酌酒動心情 玄流にて 酒を酌めば 心情 動く

（『民経記』嘉禄二年（一二二六）六月二十三日）

という詩において、すでに先の「柳岸」「蘆洲」と「蒼波」「白霧」の橘直幹の『和漢朗詠集』「行旅」に載る二句が使われているからである。状況として日記に、「予候於舟中即事詩可書入也」（『民経記』嘉禄二年（一二二六）六月二十三日）とあるから、興福寺と東大寺を参詣し、木津から舟に乗った時の即事の詩であることが分かる。

ここに表現の生成過程が明らかになる。つまり、嘉禄二年（一二二六）六月二十三日の即事の詩において、その二句を換骨奪胎し、嘉禄二年（一

二二六）九月十五日の日記の記事において、その対偶を用いながら、そのその日の詩会の詩でも同種の表現を实践する。それは、私事での試行から公的な詩会での披露に向けての過程である。

別に次の記事にその作詩に向けての心理が垣間見られる。

時々時雨度松軒、黄門令参軒廊御卜給、先中納言殿令参岡崎殿給云々。入夜、月色照孤砌、時雨灑松軒。雁声過枕破曉夢。一。『民経記』嘉禄二年（一二二六）十月九日

当日は実際に時雨が軒松に降りかかっていた。それで「時雨度松軒」としたのであるが、「入夜」以後の「月色照孤砌、時雨灑松軒」は五言の対句に作って、その後、一句であるが「雁声過枕破曉夢」という七言の句を置く。これらは、先に示した「葉展影翻当砌月、花開香散入簾風」葉展びて影翻る砌に当る月、花開きて香散じて簾に入る風」、『和漢朗詠集』卷上「蓮」白居易「胡鴈一声、秋破商客之夢。巴猿三叫、曉霑行人之裳。胡雁は一声、秋は商客の夢を破る。巴猿は三たび叫びて、曉は行人の裳を霑ほす」、『和漢朗詠集』卷下「猿」大江澄明）を踏まえるが、五言対句の下句は元は「時雨度灑松軒」として、そのうち「度」を衍字としてゐる。この「度」の字を記したのは、その前の実際の情景である「時雨度松軒」に引きつられたと推測される。それを衍字としたのは、五言の対句にするためであると考えられる。それはやはり、作詩を意識していたからであると考えられる。ここに日記の記述と詩形との関連を垣間見ることができるのである。

## むすび

一般的に、鎌倉時代は漢文学の衰退期とされている。<sup>注14</sup>確かに、若き日の藤原経光にとつての過度の『和漢朗詠集』への依拠は単純な換骨奪胎であつたろうし、藤原定家のともすると強引とも言えるような『白氏文集』引用は、やはり漢籍に対する概念の狭隘さを物語っていると思われる。ただ

し、それは衰退というより、前代とは相違する漢籍受容のスタイルであるとも捉えることができ、そこにはまだ説明すべき課題が山積していると考えられるのである。本論はそのことをひとまず『民経記』に見た。

注

1, 佐藤恒雄氏『藤原定家研究』（風間書房・平成十三年）「明月記の中の白詩」によった。以後の佐藤氏の説はこれによった。

2, 管見では藤川功和氏「藤原経光と『民経記』」（広島大学大学院文学研究科論集）第六十四巻・平成十六年）のみ。

3, 本文は、大日本古記録本『民経記』（東京大学史料編纂所編・岩波書店）と国立歴史民族博物館のデータベース『藤原経光卿記』を用いた。

4, 例えば、「何唯欲<sub>レ</sub>暮鐘<sub>レ</sub>声、聞<sub>レ</sub>之悦<sub>レ</sub>心。欲<sub>レ</sub>明之鐘<sub>レ</sub>声、惜<sub>レ</sub>之消魂、是又知<sub>二</sub>生死必滅之習、飛花落葉之觀念<sub>一</sub>」（『民経記』天福元年（一一三三）三月二十日）の「生死必滅」（生者必滅）であろう。『和漢朗詠集』にも「生者必滅、積尊未免梅檀之煙。樂尽哀来、天人猶逢五衰之日」

生ある者は必ず滅す、積尊でもないまだ梅檀の煙を免がれず。樂しみ尽きて哀しみ来る、天人もなほ五衰の日に逢ふ」（『和漢朗詠集』巻下「無常」大江朝綱）と類似句があるが、鐘の声によつて必滅を考えるのは、周知のとおり、『平家物語』の冒頭に、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響有り」（『平家物語』）があり、「習」との関連で言つと、「生者必滅、会者定離は世の習い」（『平家物語』「維盛入水」）がある。

5, 例えば、「天曙帰宅了。誠是、除目春朝、蒼天在<sub>レ</sub>眼者歟。毎事冷然也」（『民経記』貞永元年（一一三三）二月一日）というくだりは、藤原為時の「苦学寒夜、紅淚潤襟、除目後朝、蒼天在<sub>レ</sub>眼、苦学の寒夜に、紅淚襟を潤し、除目の後朝に、蒼天眼に在<sub>レ</sub>り」という句に拠る。『続本朝往生伝』

『今昔物語集』巻二十四「藤原為時作詩越前守語第三十」「古事談」第一第二十六話『今鏡』「むかしがたり」「からうた」に引用される。他に『十訓抄』巻下第十第三十三話に引かれるが、時代が合わない。『古事談』で

は「霑袖」、「今昔物語集」では「後朝」となっている。『今鏡』では「苦学の寒夜に、紅淚襟をうるほし、除目の春朝蒼天まなこにあり」とある和文であつて、「蒼天在<sub>レ</sub>眼」ともなっていない。完全に一致するのは、『続本朝往生伝』だけである。

6, 「定家と「暗雨打窓声」——日記において和歌において——」（『国文学攷』）  
〈広島大学国語国文学会第一六六号・平成十二年〉

7, 「雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>強力之身<sub>一</sub>、一身供奉、今夜懸<sub>レ</sub>人猶<sub>二</sub>以危急<sub>一</sub>。紅榮黃落之悲、心中弥切」（『明月記』寛喜三年（一一三一）八月十九日）の「紅榮黃落」が、「紅榮黃落、一樹之春色秋声。結綬抽簪、一身之壯心老思。〈紅榮え黃落つ、一樹の春の秋色の声。綬を結び簪を抽く、一身の壮なる心老いの思ひ〉」（『和漢朗詠集』巻下「老人」菅原文時）を踏まえるとする（『明月記』の表現）第五号・平成十二年十一月）。

8, 「空階雨滴之句数返。借筵退出」（『明月記』文治四年（一一八八）九月二十九日）が「三秋而宮漏正長、空階雨滴。万里而郷園何在、落葉窓深へ三秋にして宮漏正に長く、空階に雨滴る。万里にして郷園いづくにか在る、落葉窓に深し」（『和漢朗詠集』巻上「落葉」張説）を、「大賞会予所<sub>レ</sub>給御給泰通卿申<sub>レ</sub>之、當時不<sub>レ</sub>許云々。給人依<sub>二</sub>不運<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>傍申奪之条、難<sub>レ</sub>堪事也。雖<sub>レ</sub>化<sub>二</sub>原上土<sub>一</sub>、猶不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>召<sub>一</sub>返御給」（『明月記』正治二年（一一〇〇）一月五日）および「今度御製且可見之由有仰事、披之金玉声」（『明月記』建仁元年（一一二〇）六月十六日）は「遺文三十軸、軸軸金玉声、龍門原上土、埋骨不埋名（遺文三十軸、軸々に金玉の声あり、龍門原上の土、骨を埋むれども名を埋めず）」（『和漢朗詠集』巻下「文詞 附遺文」白居易）を踏まえる。前者「空階雨滴之句数返」は降雨に際して実際にその句を思い描いているという場面、原詩の閨怨の意味はない。後者の「原上土」は叙位での不満についての引用であり、「金玉声」は詠歌校閲を下命した時の記事で一応は、深意を持つて引用しているといえる。

9, 佐藤氏は、「前後不覚、戌時許著<sub>二</sub>本宮<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>寝。此路嶮岨難<sub>レ</sub>過、於<sub>二</sub>

大行路「不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>違記<sub>一</sub>」(『明月記』建仁元年へ一二〇一十一月二十日)が、熊野御幸に関する記事で、嶮岨の路を越えたという文字通りの行路難を示すのみであるとする。

10, 佐藤氏は次のような例を挙げている。「新豊遺民只有<sub>二</sub>一身<sub>一</sub>」(『明月記』嘉祿元年へ一二二五二月二十八日)「今折臂翁之身、雖<sub>レ</sub>老、彼禪尼之言争黙止哉」(『明月記』天福元年へ一二三三六月四日)「樂天樂府之篇、誠<sub>二</sub>辺功生遲<sub>一</sub>、堪<sub>二</sub>武芸<sub>一</sub>遂赴<sub>二</sub>胡城<sub>一</sub>」(『明月記』健保元年へ一二三三閏九月三日)「去秋為<sub>二</sub>御使<sub>一</sub>、追<sub>二</sub>能玄律師<sub>一</sub>、今日預<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>、只可<sub>レ</sub>詠<sub>二</sub>大行路之篇<sub>一</sub>」(『明月記』健保元年へ一二三三十月二十九日)「抑白氏文集之中多有<sub>二</sub>此句<sub>一</sub>、人生七十稀」(『明月記』寛喜二年(一二三〇)十二月三十日)を挙げる。「新豊」は、出典が「新豊老翁八十八、頭鬢眉鬢皆似雪、玄孫扶向店前行、左臂憑肩右臂折<sub>二</sub>新豊の老翁八十八、頭鬢眉鬢皆雪に似たり、玄孫に扶けられ店前に向かいて行く、左臂肩に憑り右臂折る<sub>一</sub>」(『白氏文集』卷三「新豊折臂翁」)で、『白氏文集』の肘を折って生き延びた新豊の老人のその背景とは関係なく、老身のみを示している。「折臂翁」も、遠き日の零落と旧知の死去を歎くのに用いたこの両句を「成句化」されているとする。また藤原為家が蹴鞠に興じている状態を「存外」とすることに『白氏文集』「新樂府」を引くのは、辺功が遅いにも関わらず、武芸に堪えて胡城に赴く状態を述べる「新豊折臂翁」のそのくだりに投影しているとする。『白氏文集』卷三「大行路」は左京権大夫親綱の失脚を記す。君臣の関係が全うし難いことを示した部分を指摘する。「人生七十稀」について、出典が「得見成陰否、人生七十稀<sub>二</sub>陰を成すを見るを得るや否や、人生七十稀なり<sub>一</sub>」(『白氏文集』卷十「栽松」二首)其一)で、佐藤氏は、白樂天は自足する心境を含むのに対して、官位昇進に思いを馳せる定家はその深意まで受け入れていないとするが、高齢の稀なることという点では、大きく外していないと考えられる。

11, 佐藤氏は次の例を挙げている。「池苑皆仍<sub>レ</sub>旧、対<sub>レ</sub>之争涙不<sub>レ</sub>垂」(『明月記』健保元年へ一二三三十一月二十三日)。「池苑皆仍<sub>レ</sub>旧」は、出典が

「帰来池苑皆依旧、太液芙蓉未央柳<sub>二</sub>帰り来れば池苑皆旧に依る、太液の芙蓉未央の柳<sub>一</sub>」(『白氏文集』卷十一「長恨歌」)で、安樂寿院の庭園のたたずまいを、『白氏文集』「長恨歌」の「池苑皆依旧」から踏まえて、「対之争涙不<sub>レ</sub>垂」は楊貴妃の容姿を思う気持ち「対<sub>レ</sub>之争涙不<sub>レ</sub>垂」から踏まえるとする。佐藤氏は「いささか誇大の過ぎている感を否めない」として、「定家は古人を慕う心性はそれとして、なお「長恨歌」の詩句表現の方に、現実の自身の経験世界を近づけたいと望む心が強かったのだと推測される。十分に人口に膾炙した「長恨歌」の一部表現を、無理に現実には当てはめた結果、表現は文飾に近いものとなる」という。

12, 最も著名な例が「世上乱逆追討雖<sub>二</sub>滿耳不<sub>レ</sub>注<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>。紅旗征<sub>レ</sub>戎非<sub>二</sub>吾事<sub>一</sub>」(『明月記』治承四年(一一八〇)九月)であろう。これは「紅旗破賊非吾事、黃紙除書無我名<sub>二</sub>紅旗賊を破るは吾が事に非ず、黃紙の除書我が名無し<sub>一</sub>」(『白氏文集』卷十七「劉十九同宿」)が出典である。これに対する指摘としては、細野哲雄氏の論が早い方か(『明月記』世上乱逆追討雖滿耳不<sub>レ</sub>注之。紅旗征戎非吾事」の語をめぐる再検討」(『国語と国文学』昭和三十一年二月)。この引用をいかなる意図を持っていたとしてとるかはその説あるであろうが、表面的には戦乱には関知しないという官人の意識の表明という点においては、その背景を踏まえていることは間違いない。

13, 先に示した『和漢朗詠集』に採られた句以外は、例えば「頗以有<sub>二</sub>傾城之色<sub>一</sub>」(『民経記』貞永元年へ一二三三三月一日)は「不如不遇傾城色<sub>二</sub>傾城の色に遇わざるにしかず<sub>一</sub>」(『白氏文集』卷四「李夫人」)を踏まえる。

14, 山岸徳平氏『日本漢文学史』(吉川弘文館・昭和二十九年)川口久雄氏『三訂 平安朝日本漢文学史の研究』(下)(明治書院・昭和六十三年)



# On the element of Wakanrouei-shu (和漢朗詠集) in Minkei-ki (民経記)

Yasuo ONO

The aim of this paper is to ascertain the influence on Minkei-ki (民経記) of Wakanrouei-shu (和漢朗詠集). Wakanroueishu, an anthology of Japanese and Chinese poetry, is edited by Fujiwara-no-kintou (藤原公任) in the middle period of the Heian era, and Minkei-ki, a old diary, is recorded by Fujiwara-no-tsunemitsu (藤原経光). Wakanrouei-shu (和漢朗詠集) has a great influence on not only in Japanese poetries but also in many literary works especially in Kamakura era. When he wrote his diary he sometimes used many words of Wakanrouei-shu (和漢朗詠集). This phenomenon projects is more salient than in any other works.